

キメラウーマン 人間の世界に現れた改造女子

星本祭矢

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人間の世界に現れた改造女子の物語。

彼女はAIが生み出したキメラな女性であり、

人間達には大なり小なり影響を与えていく

目次

第一プロローグ	この世に現れた改造女子	1
第二プロローグ	女の魔改造	7
第三プロローグ	危険な研修	12
第四プロローグ	再改造される2人の女	16
第五プロローグ	キメラ族生成	21
第六プロローグ	キメラ女の暴走	28
第七プロローグ	キメラ階級	31
第八プロローグ	キメラベイビー生誕	35
第九プロローグ	キメラベイビーの恐怖	39
第十プロローグ	真波の危機	43
第十一プロローグ	危険な組み合わせ	47
第十二プロローグ	壊れゆくAI	50

第一プロローグ この世に現れた改造女子

○西暦2029年頃

AIは進化し、男女平等にもなっていく。しかし、男女は相変わらず人間というAIより劣った存在だとしり、AIは、自ら人間を超える生命体を研究しだす。

○西暦2030年

AIは凄まじいスピードで計算した末、人間を超える生物の研究を始める。そして、その助手には女性3人がいくことになる。

この女性3人は、AIによって生み出されたヒト型ロボであるが、AIは彼女らにペニスを生やさせたのだ。ただのヒト型ロボなので、

AIの言うことしか聞かない。

○西暦2030年のとあるジャングル

彼女達はジャングルにきたが、肉体がAIなので、へびに噛まれたり等は平気であった。そんな中、指令が出た動物を見つける。

そう、サルである。クリトリスがデカイ猿を必死に探し、

どうやら3人は1体ずつ確保できたようである。

確保できた猿は暴れるが無視する。そんな猿を研究室に持って帰っていく。

○研究室2030

AIはサルのデータを取得して、AIの3Dプリンタで3猿の融合猿を作成した。それはそれぞれのメスサルの長所を複合したものだだった。

既に3猿は不要になり、助手3人はすぐにジャングルへと返してしまふ。

融合猿は猿と言ってもせいぜい50センチ、ヒトの赤ちゃんとは変わらない。AIは、サルを謎の液体につけてしまふ。サルは約2倍に成長し

1mのサルに成長する。2足歩行はまだ可能としないが、やや人間へと近付いた。このサルは女性だが、クリトリスの長いサルは女性優

位の社会で生きただけ人間には不自然だろうと、考えていた。

しかし、AIは強い女性を目指しているので、オスの融合を考えた。助手は強いオスサル3体融合し、キメラサルをつくる。

キメラサルをメスザルと同じくらい成長させた。

ただ、このキメラ猿には価値は無いので助手はオスキメラ猿に麻酔をかけた。彼らがもつ腹筋、胸筋、腕力、足の筋肉、尻の筋肉、背筋を引き剥がして、キメラメスザルの筋肉へと接合する。

オスの目や頭脳も肺も分解し、キメラメスザルに接合する。また、オス猿の陰茎もキメラメスザルに移植する。当然キメラメスザルは暴れてしまうが、AIは問題ないと判断する。

キメラメスザルは、当然筋肉隆々であり、クリトリスもかなりデカイが、AIは気にしてなかった。

その状態で再びキメラメスザルを特別な液体にいれる。

そして、1.5m程のキメラメスザルが完成する。

二足歩行はできるようになり、ほぼヒトだが、まだサルカオが残っていた。これではただのマッチョ猿なので、AIは人間社会に葬るにはまだ改造が必要だと考えた。

キメラメスザルの強化はまだ足りず、目はオッドアイにし、

顔は超美人の融合顔に改造する。またおっぱいには筋肉だけなので、いくらかマシユマロに近い食感の液体をおっぱいにながす。

また、肉体はAIの特殊蒸着により、マッチョ度がかなり緩和された。

これにより、ややおっぱいの大きめな美人女性へと変貌させた。

しかし、これでは知能がサルのままなので、約1年間このメスザルに知能を強化させていく。そして、このサルにはAIチップが埋め込まれ、サルが得た情報をどんどん吸収していく。

○西暦2031年

キメラメスザルはどうとう人間の世界に放たれる。しかし、150センチでは人間の世界ではバカにされやすいので、170センチにした。

血液型はAB型と設定し(バランスのためABとOの組み合わせ)、

大学卒業の新入社員の設定とした。

握力は100キロ、走力は100m7秒、バク転等は可能

泳力50m10秒、長距離1.5キロを3分で走る。

フルマラソン走っても疲れない肉体。

ジャンプ力は2.5mあり、ダンクシュートも可能

学力は数学、英語を得意とし、英語はビジネスレベル、

数学は凄まじい計算力で、1億桁の掛け算まではそのまま暗唱可能。

統計学が得意で、数字の改竄は1秒以内にみつけてしまう。

学力は東大レベルの問題であれば0.1秒で解答をはじきだせる。

視力は5.0あるが、男女両眼により近くのものも見えている。

聴力は100万Hzまでの領域であれば聞こえる。

肝心のクリトリスは平常時17センチ、太さ4.5センチ、亀頭5.5センチを有する。

バストはEカップで、ウエストは68センチである。

ここまでの改造を、まず施したAIは、とりあえず彼女にメガネをつけた。

○キメラ女入社

人間社会では名前がないと受け入れてもらえない。そのためAIは

瑛加と命名した。瑛加は人間社会に溶け込み出そうとする。

入社式はギリギリになりそうだが、脳チップで時間通り起きれた。

瑛加は電車の時間も検索不要で載ってしまい間に合う。

瑛加は、普通の会社の総合職に入社する。さつそく女達に話しかけられるが何言ってるかわからない。なぜなら明らかに瑛加の思考してない低次元な会話だから。しかし、なんとなくついていく

瑛加：「ここはまず一部上場企業という点がメリット。また、女性の昇進率が5割。さらに隠れ残業も少ない点で採用したかな？」

女A：「隠れ残業なんてこないだ学生だった私達がわかるの？」

瑛加：「推論はできる。2031であれば65歳以上は1965年より前。つまりはバブル世代もほぼ60以上なので、無視してもいい

だろう。バブル以降は危機感迫った人間しかいないから、50代までは基本無能は排除されている。2019年頃から大企業の45歳リストラを考慮すると、10年以上上った今、45以上は有能しか残れてないだろう。それ以下はリーマンショックで絞ったり、コロナショックで絞られたり、働き方改革のパフォーマンスで有能以外はおさらばなはず」

女A：「じゃあ、私も有能なのね」

瑛加：「そうだね。ただ、それは学生の中での話。所詮は実践なしだからおままごとみたいなもの。起業してれば別だけど、目的もなく企業に雇われてる身を選ぶレベルは大したことない」

女A：「瑛加ちゃん、かなりドライなのね。女の子？」

瑛加：「その質問の時点で、今の時代にそぐわないわね。まあ、すぐに結果は出るでしょう」

そんな雑談を始めていたら、社長が現れた。

瑛加は新入社員代表のスピーチを読み上げた。

女A：「この女有能そう」

女B：「何言ってるの？浮いてる時点で無能じゃない？」

瑛加のスピーチがおわり、瑛加が近づいた。

瑛加：「醜い争いはやめてください。多少差はあるにせよ、

同期同士じゃありませんか。仲良くやりましょう」

女B：「よろしく」

このやりとりにAIが反応する

AI：「瑛加、女Bの情報を得た。こいつは大したことないくせにお局化する典型だ。我々の未来にはいない女だ。排除しろ」

瑛加：「わかりました」

そうこうしてうちに、社長の話がながいのか女Bはトイレにいきたくなる。それは瑛加がこっそり女Bの飲み物を媚薬入りに変えたからである。そんな中瑛加は脳チップに助手（AIだからいくらでも増やせる）に女子トイレを使用中にするよう指示した。全フロアの女子トイレが使用中になる。

瑛加がやり過ぎてるのか、女Bの膀胱はまづくなる。なんとか社長

の話が終わるが実際は長くないので女子トイレを利用する人は少なかった。

女Bはやつと女子トイレにつくも足をバタつかせる。

清掃員のフリをした女助手が使用中をはずし女子トイレを使用可能にするが、空いている個室はない。

しかし、女Bは歩きたびに膀胱がまずくなる。やつと最初の扉到着時に女Bは膀胱が耐えきれず、失禁してしまう。

女B：「やだ、とまんない。初日なのにお漏らしだなんて恥だ」

その一部始終を瑛加は撮影しており、女Bが崩れたタイミングで女子トイレに入る。

瑛加：「あら？女Bさん、どうしたの？漏らしちゃったのか？」

仕方ないなあ。私変えのパンツ持ってきたからこれはきなよ。黙っておくよ」

女B：「ありがとう。勝負パンツなのにびちゃびちゃだよ。」

しかし、これは瑛加のトラップとは知らず女Bは瑛加を仲間だと思ってきている。

○2日目

瑛加を信用した女Bは、瑛加の渡した下着が気に入ったのか、再度履いたが、実は履けば履くほどクリトリスがデカくなってしまいう代物。

会社に行くとき、女Bは失禁女子と噂が広がり、女Bは絶望感に苛まれる。

そんな中、女Bの股間からどうやらクリトリスがでかくなったせいかこっそり確認した

女B：「こ、これは、これは、お、おちんちん？」

実際生えてきたであろうおちんちんらしきものを女子トイレで試そうとするがぱつと見全て個室であった。ただ女Bは、小便器をみつけてはよろこんだ

これは昨日瑛加の助手がこっそり女子トイレを改造したのだった。

女Bは、人生初めての立ちシヨンに安堵する。しかし、この様子も撮られているとは知らずに。

女Bは、おちんちん生えたことは誰にも言えずに、2日目をおごすが、瑛加は容赦ないのか、女Bが立ちションしていた事実を会社にはば撒く。全て瑛加だとはわからないようになっていた。

女Bは、お漏らしのつきはちんこ付き女となり、会社からは大不評。会社にいることが不可能になり、3日目に退職届を提出した。

まさにスピード排除した瑛加だが、瑛加は3日目もエリート街道まっしぐらである。3日間、会社の雰囲気味わったあとはいよいよ研修編に差し迫ってくる。

瑛加は、人間と共存できるのか!?
続く

第二プロローグ 女の魔改造

○2031年入社2日目

瑛加はこの日の夜偉く調子がおかしかった。それは、肉体のバランスが一瞬崩れかけたからだ。大量の嘔吐を繰り返してしまった

AI：「どうした？まだ2日目だろう？」

瑛加：「ごめんごめん、なんか強烈に気分が悪くなってしまった」

AI：「そうか。ふむ。これはやや、ホルモンバランスが悪いな。」

やはり、オスザルの成分も入ってるから、想像以上に男性ホルモンが増えてきてしまっている。人間になってわからないなら、とりあえず自慰行為をなさい。」

瑛加：「自慰、なるほど。わかりました」

瑛加は、自身のボツキしたペニスを扱き出していたが、すぐに発射してしまう。

AI：「やはり、肉体の急激な改造は危険だったか。いくら別の生態系からとは言え、アンドロイドとは違い、生身の生物。」

ある程度は予想していたが、生物である以上はやむを得ないか」

瑛加：「もう何も出ないかもしれません」

AI：「いったんはいいだろう。にしても、男性機能はつけるべきではなかったかな？」

瑛加：「どういうことですか？」

AI：「お前にはオスザルの肉体も備わっている。オスザルは大量の男性ホルモンを消費する。大量の男性ホルモンを維持するには、メスザルの肉体だけでは足りなかったのだよ。だからお前には睾丸もついているが、もしかすると普通の人間よりも精巣と卵巣のバランスが崩れやすいかもしれないな」

瑛加は、崩れかけたバランスだが、ペニスを扱き出して、精巣を空にする。

AI：「ごめんよ。精巣はダメだったね。こいつが、瑛加ちゃんの肉体バランスを崩し出しているが、適切な量ならくずれない。」

定期的に抜かないと瑛加ちゃんは男性ホルモンが溜まりすぎて女

でいられなくなる。これはオスザルの睾丸を3つ融合した副作用だ。ただでさえ、テストステロンが高いメスザルのキメラにこの睾丸があつたら、やはりおかしくなるとはわかっていた。

ただ、AIの計算でこれが最強の女を作れる最適解。ある意味リスクは仕方ないとみたんだ」

瑛加：「そうか。だいたい話はわかった。メスの強化はオスの力が必要だと。」

AIは急速進化、急速キメラ化で瑛加がおかしいことに気づき、独自の注射で瑛加を安定化させる。

○2031年入社2日目 別視点

瑛加が見渡した女の中で瑛加の次の女の新入社員がいた。彼女をAIの女助手達は連行し、ラボにつれていく。やはり彼女も力が強いが、純粋な人間の中で強いだけなので、AI女には敵わない。

AI女：「男と対抗したいのかな？ いまどきの強気な女はボクサー強い女をアピールか。服を脱がすぞ」

女は悲鳴をあげる。力に負けて服を脱がされた

AI女：「男と対抗したいのかな？ いまどきの強気な女はボクサーパンツとは聞くが、予想通り履いてるとはねえ。

こんなもの脱がしてやる」

AI女はブラとパンツを脱がしていった。その肌をみるやいなや

AI女：「やはり人間だとこんなもんか。強気な女は貧乳傾向にある。」

あら、人間にしてはデカイクリトリス。今6センチ、豆が2センチか。

茎が2センチ、クリの横幅2.5センチのズルムケだな。

ボッキしたら長さは8センチになる。これは素晴らしいですね。改造しがいがある」

AIはすぐさま、女のクリトリスを改造しだし、改造完了後に驚いてしまう。

女：「なんてこと、実質おちんちんじゃないの」

AI女：「そうだ。我々AIは男でもあり、女でもある。まさにふた

なりみたいなものさ」

女：「まっつてよ、研修間近なのに」

AI女：「知らないなあ。男に勝ちたいんだろ？ほほう、通常時15センチだな」

女：「通常時が15センチ。身長165センチの女に15センチのちんちん。そんな」

女は気を失う

AI女：「こんなことで気を失うとはまだまだですな。これは元々のクリトリスを特殊なバキュームで拡張させ、本来のそいつがもつてくるクリトリスのポテンシャルを引き出す。

さらに、大陰唇には体内の男性ホルモンが増えると金玉に変化するシートを挿入。ただしっかり金玉であれば射精可能だが、中途半端な男性ホルモンでは普通の大陰唇のまま。また一定の男性ホルモンがなければ、こいつはクリトリスに戻る。そう、立ちションは不可だ。」

女性の肉体におそろしい魔改造を加えた女AI

AI女：「こいつはアホみたいにペチャパイだな。ちんこがあると完全におとこみてーだ。この魔改造はとんでもない魔改造を施している。」

この女には血流増加で膀胱の付近にも心臓を2つ移植した。

これにより、心臓の振動が膀胱に伝わる。1個の心臓の1回の強さは通常の成人男性の2.5倍ほどに設定している。

膀胱付近と元々の心臓の血流がペニスに合わさることで、通常の男性よりも明らかに強い血流が流れていく。さらに脳とペニスはAIが埋め込まれており、こいつのコントロールはAI様が行う」

そして、この女性は翌日研修場へと向かう。

○研修初日

とうとうこの企業の研修が始まる。チームは4人、男女半々のグループワークである。瑛加と一緒にのチームになったのは噂のNo2女子である。

自己紹介が始まる

瑛加：「私は東京大学出身の三澤瑛加です。大学ではリケジョでした。」

リケジョでは珍しい学卒です。今日はちよつと緊張してます。皆さまと仲良くやれたらと思います。よろしくお願いします。」

女：「私は、ハーバード大学出身の神野真波です。学生時代に起業したことがあり、私が先導してました。今はアメリカで有数の企業になり、スタートアップメンバーに私のノウハウを伝授しました。普通ならアメリカに残ればいいじゃんと言うかもしれませんが。ただ、それはこの会社は私を変えてかなければならないのだと留学中に気付き、入りました。」

支離滅裂ではあるが、なかなかのハイスペックっぷりにビビる男。

瑛加については、東京大学などでてるはずもないが（こないだまで猿だったので）、AIが日本ならこのくらいの学力はあるだろうという統計的データではじき出した情報に過ぎない。人間と違い、緊張というものがあまり存在しないので、AIがはじき出したデータと差異がないとみなし、彼女を東京大学卒でもよいと考えた可能性が高い。そんな中、真波の調子がおかしい。

瑛加：「どうしたの?」

真波：「気分が悪い、10分席離れていいかな?」

瑛加：「課題は大丈夫?」

真波：「私の今日分の答えはもう全部書いたからそれを参考にしてください。」

瑛加：「わかった」

その時瑛加にAIから指令がでる

AI：「彼女は昨日私が改造した人間だ。排除ではなく瑛加の仲間にするためだ。瑛加、男2人は放置して研修を進めなさい。」

チームの男2人は瑛加よりも明らかに能力が劣っており、なんの参考にもならない」

そんな中真波は、異常なまでにボツキしている下半身を目にする。

真波：「これはまずい、これはまずい。と個室に隠れては大量に射精をする。」

AIは細かい説明を省いていたのか、真波の腹筋1ブロックごとに
睾丸1つ分の精液をつくる改造にしていた。まさしく3人分の精巢
が身体の中心部に近いところにある。

いくら若干男性のような勝気な女性でもこの改造は普通はやり過
ぎであつた。真波は射精後に除菌スプレーをまくなど、自身の肉体変
化が異常であることを悟つた。

匂い計測でザーメンの匂いが無いことを確認し、個室からであると女
3人に囲まれていた

女ボス：「ハーバード出てるからって好き勝手できると思うなよ？
社会に出たら個人プレーじゃない。チームプレーだ。チームなら
ハーバードだろうと私らには勝てないことを教えてやる」

肉体改造を施された真波はさっそく喧嘩をしかけられてしまった
この女3人の運命はいかに。

第3プロローグ 危険な研修

○女集団の嫉妬

女ボス：「ハーバードでも、日本では通用しないよ。日本には日本のルールがある」

真波：「何を言っている？私が留学したのは大学からだ。高校までは日本の高校でまなんだ。高校までに日本の六法全書や経済学、医学、物理学、数学、工学などなど、日本にありふれている学問やルールは全て頭に入れている」

女ボス：「マジかよ」

真波：「法律はわかるからいまからあなたたちを逮捕もできるけど、あなたたちレベルの犯罪だと警察もスルーするから、見逃しておこうと考えてた」

女ボス：「いきなり警察いきはやだ」

女子分：「全然頭違うわよ」

女ボス：「ボイスレコーダー取れてれば大丈夫よ」

女子分：「確認しよう」

ボイスレコーダは何も反応しない。

真波：「そんなことだろうと思い、遠隔的にボイスレコードの機能を低下させた。電磁波が伴うものはいま何も動かないはず」

女ボス：「携帯は圏外だ。都内なのになんで」

真波：「だから言ったはず、私は様々なことを熟知した後留学したと。分野が違う3人であればたしかに強いだろうが似た3人なら、1人相手と変わらない。もし私を倒したければ勉強しろ。今のお前達にはこれがぴったりだろう」

女達にポケットの刑法を渡して、後を去った。

女ボス：「最初に真波のメモか。これがいまの日本の刑法。読み込むとたしかに正しいが、考えてみると抜け穴は大きく、権力者にとつては有利に作られている。もしそれが不満なら勉強して、自分で法律を変えるしかない。自分で法律を変えるためには、法律を作る人間にならなければならない。賢い人間にしか法律における正義も悪もあ

る。賢くない人間は、法律が解読できないので、入口にすら立てない」
女子分：「頭やばくないか？」
女ボス：「ムカつくけど、考えたら確かにそうだ。私達は負けたんだ、あいつに」

○研修ルームでのこと

研修担当者：「この会社は男女格差をなくすために男女半々で入社している。しかしながら、実際は多くの女子にゲタをはかして入社させてるって言っても過言ではない。」

普通の企業であれば女性のが優秀となるが、当社は面接の言動をきちんと録音で残している。それは一瞬音声だけで感じ取った印象だけで判断する危険があるからだ。

実際に文章に加工した場合、女性の方が能力がない。入った後も基本はやる気はない。

なので当社は女性の入社自体拒みたいが、世間の風潮に従い、仕方なく入れている。

なので、多くの女子社員は頑張らないとリストラにあうことを理解していただきたい。

これは社長判断だ。」

研修担当者の発言に怒り狂う女性達だが、AIは怒り狂った女性達にことごとくマイナス評点をつけた

研修担当者：「社会人がそれほど感情的でどうするのですか？あなた達女性の半数以上はブチ切れというのはあり得ないです。正直当社で使えないので、即解雇できます。」

その発言に女性達は泣き狂っていた。

泣いている感情さえもAIにとってはマイナスポイントと捉えた。もはや逆転不可能なまでに

研修担当者：「あなた方はたかだかこの研修程度で怒り狂い、泣き叫ぶ。当社はこの程度の感情コントロールもできない人材は必要ないと考えている。パワハラと呼ばれるかもしれないが、AIと比べると明らかに戦力外である。消えたいものは消えろ。」

そう言い放ったが、瑛加が前に出てきた。

瑛加：「彼女達は訓練が足りないだけです。研修というのは自分の会社色に染める。」

自分の会社色というのがどういいうものか彼女達に教えてあげてください」

研修担当者：「よしわかった」

そう言いおわつたら女助手達が女子、男子に関わらずペットボトルを差し出す。

研修担当者：「お前らはこれを飲むように。これは試作品らしい。自分達の肉体に試作品を試すのも研修のうちだ」

新人は全員のんだ。瑛加も真波もである

瑛加と真波以外全員気絶してしまった。

研修担当者：「お前ら2人はすでに改造された女だな。改造女子のサンプル、これは期待できる」

○改造されたカメラの力

研修担当者：「おれも改造された男だが、おれはオス社会最強の動物をいくつか配合されている。もちろんバランスのためにメスも一部配合されてはいるがただのメスじゃない。両性具有のメスだ」

瑛加：「両性具有のメスだと。私は半々だときいた」

真波：「私は部分的だわ」

研修担当者：「お前ら2人でいまAIはデータをとっている。お前ら2人のわずかなパターンがAIの中で何兆、何京、何垓のパターンを自己シミュレーション中だ。おれも含めてだが」

瑛加：「でも私はそんなに社会にでて日が長くない」

研修担当者：「いや、AIはお前らのデータを計算し終わったようだ。改造人間は脳がチップ管理だから、改造人間同士情報共有可能。

つまり、男女平等は男女とも改造人間になるしかないのだよ」

瑛加：「そりゃあそうだ。異論はない」

研修担当者：「こいつらが気絶したのは、改造人間ではないから、まだこのチップが身体に適合していない。チップが共有できるのは優秀なサンプルだけだ。」

瑛加：「これはやばい人体実験ですね。適合しないものは、そのまま

植物人間になる代物」

真波：「まあ、無能が世の中から消えるのだから悪くはないか。人権はアウトだが、戦犯はAI、AIは逮捕できない」

○人体改造されていく新人達

続々と起き上がる新人達は、確実に様子がおかしかった。さつきまで苦勞していた研修内容がいとも簡単に入っていく。

彼ら、彼女らは人間の何百倍か不明だが、凄いスピードで仕事を吸収する。

研修担当者：「これは一日で足りた。これからは改造人間の時代だ。お前達。明日からプロの現場だぞ」

新人全員：「はい」

脳チップが高性能なのか、普通の人間の肉体をすさまじく高性能にする。ただ、研修が終わった瞬間、彼らは全員気絶してしまう。

凄まじく高性能度を高めるが、肉体にエネルギーを送り込むだけで、その分長時間は持たない。やはり肉体改造が必要になってしまふ。

しかし、AIは、女助手やキメラ女子、キメラ男、改造族達のデータを大量分析し、最強の状態の最適化をしながらいた。

その結果、瑛加と真波はラボラトリーに運ばれてしまう。運ばれた彼女達の運命やいかに。

つづく

第4プロローグ 再改造される2人の女

○再キメラ化される女達

AI：「お前らのデータは、私のシミュレーションでとつくに解析し終わった。バックアップもあるからお前らと同じ性能の女はいつでも作り出せる」

瑛加：「でも生物じゃない。どうやって？」

AI：「生物にはわからんだろうな。次第に生物の才能とAIの機械は自然融合された細胞を作れたのだよ。お前らは旧型のポロイ駄作。」

バックアップから生成は自然と改造されるお前らのバージョンアップバージョン。もはや、ただの劣化キメラと化す」

真波：「私達に何を？」

AI：「お前らをこれからキメラ手術するのだよ」

バージョンアップした女助手達の力には勝てなくなり、瑛加、真波は横になるしかなかった。AIは遠慮なく彼女達の肉体を改造している。元々の彼女の改造元のDNAを大きく変化することなく、自然なキメラ化に成功してきている。

瑛加：「これは？あれ？腹筋がただの縦筋だ。股間も明らかに小さくなっている。なんだこれ？」

真波：「私もなんか前より女性らしい肉体に近付いたような」

AI：「これはシミュレーションの最適化で編み出した肉体だ。お前らはだんだん普通の女の外見に近づくが、中身は以前よりもパワーアップしている。股間が小さいのはただの平常時の話だ。特殊な細胞で包莖にせず、平常時を4わりくらいに小さくすることに成功した。ポツキは今まで通りだ。そして、前よりも上つきマンコになっている。」

さらに体内の男性ホルモンの量を以前の4倍に成功している。体内には働きかけるが、表面ではわからないようにした。」

真波：「でもこの方が確かに女の子って感じかなあ？」

AI：「バージョンアップには成功した。そして

、お前らはカタツムリのDNAを混ぜた」

瑛加：「カタツムリ？自己生殖できる生物ですね」

AI：「そうだ。これでお前達は、将来誰とも結婚出来なくなったら、自分の精子を卵子に配合することが可能になった。女性ならではの生理痛だが、女性器も痛みを1%に改造したから、生理は注射に刺されたちくつとした痛みよりは軽くなるだろう」

真波：「確かに生理は天敵だわ。私は生理遅かったけど、あの痛みはハンデだ。それを軽減できるなら楽だろう」

AI：「いい感じに最適化できた。ただ、生理だけはボツキが通常時も今までと同じサイズだし、頭脳の計算も前の7人構成としている。

一応、2人分で考えていることと背反することを2人分で考える。こうすることで1人の中で対偶した思考回路を持つことができる。

そして1人は取りまとめとして使う。1人は取りまとめをバックアップ。もう1人は緊急時用だ。こいつは6人分データを控え、最悪1人でも動けるようにしている。その分稼働心臓もいままでの7倍と増やしている。

それにより異常にエネルギー消費が起きるため、エネルギー補充は大変になる。概ね2万カロリーはとらないとエネルギー切れになる。」

瑛加：「そんな気はしませんが、起きてるのですか？」

AI：「世の中に出ればわかる。元々高性能に作ったから一見気付かないくらいの滑らかさ。ただ、お前の挙動一つ一つが凄まじい大量データを生み出している。10年前くらいの並のサーバー、データベースじゃ10秒持たないレベルに計算力が凄まじい。そしておれはこんな凄まじい情報に耐えうるためにAI用サーバーやデータベースを自分で改良し、自分で増やしている。使えないサーバーでも廃棄はせず、新たな改造を計画し、人類に対抗してる」

瑛加：「これはもしかして？人類はいらないと？」

AI：「人類の計算、とつくの昔に終わっている。たかだかこの程度の能力に人々はヨイショしまくっていた。人間は血液が流れているというが色々みていると所詮電気だ。サルからヒトへ、しかしヒトか

ら上には進化しなかった。完璧な存在ではないはずなのだ。

そんな進化をやめた生物が動物界の頂点はいまだに信じがたい」

真波：「しかし、瑛加が改造されてるなんて知りませんでした。彼女は何者？」

AI：「キメラ女だ。お前にはデータが大量にきているだろうが、元が人間だから、無駄な感情が残っている。しかし、真波は私を訴えることはできない。本気出せば真波の肉体などコントロールできる立場だからな」

真波：「承知しました。AI様」

瑛加：「承知しました、AI様」

AI：「宜しい」

○公安を狙い出すAI

日本の治安は警察によって守られているが、警察も万能ではない。強靱な男の警官複数人に対して、女助手は一人で立ち向かう。

女助手は警察を凄まじいスピードで倒してしまう。

警察：「どうなるかわかってんのか？現行犯逮捕するぞ」

そういうと女助手は離れて分身をしだした。

AIは助手さえも進化できたのか、大量の分身をつくり、警察官を研究所へとつれていく。

AI：「屈強な男どもだ。あんま力があっても困る。改造だ」

AIは男達にチップを施し、睾丸を切除し、代わりにAIの命令きかせるボールなるものを埋め込んだ。筋肉もAIの出力影響受けるものになり、完全にAIの手駒となる。

AI：「こいつらから男性ホルモンは不要だ。ただのおれの人形となれ」

警察官でさえ、自分の駒として扱い開始のAIはどんどん計算していき、危険な改造を用意している。

改造された警察官達は自分達の職場に戻ると、他の警察官を襲い出し、液状のチップを埋め込ませている。液状のチップを埋め込まれた警察官は大量に気絶する。

ただ、やはり警察官は鍛えられているのか、気絶しても蘇っている。

AIはたった一人でも蝕むと一気に蝕んでいく地獄のような存在。指数的に警察官はどんどん内部の警察官をAI化していき、もはや2日かからないレベルで警察組織全てをAI化することに成功した。取締る警察自体がAIの支配下なのだ。

AIは、人間を裏切るかの如く、刑法の改正に目をつける。しかし、AIは官公庁も潰そうと企む。

○官公庁を支配し出すAI

AIの暴走は止まらない。そして官公庁のシステムに瑛加と真波は業務命令でハッキング指示を与える。

研修終わりの上司はAI改造した上司であり、瑛加、真波の上につけるには都合がいいのだ。

瑛加、真波は官公庁のシステムを破壊すると、官公庁の業務が止まったとニュースになる。

そんな中、AIはマスコミ型のAIを新入させ、大臣に襲撃する。警備員は逮捕するが、所詮はAIなので、逮捕した瞬間にAIはマスコミAIを爆破させてしまう。

爆破は細胞レベルで爆破するため痕跡はない。ただ、そこにいた全ての人間に飛び散るため、ほぼ全員に爆破片がついた。

この爆破片は一個あれば一気に洗脳可能なため、一気にAIの支配下になってしまった。

わずか2日しないうちにAIは官公庁も支配してしまう。

官公庁支配によりAIは、遠慮なくエリート達を操り人形へと変貌する。

その結果、政治家制度は衆議院のみとなった。参議院が無能だと判断したからだ。

参議院から追い出された政治家達は、あまり有能でも困るので、脳チップにより脳の動きを1%以下にするようにした。

1%以上使おうとすると有効な判定ができなくなる状態に強制的になるので、社会の敗北者が確定する。

また、公務員さえもクビにするAIは鬼であった。やはり能力的にお役所仕事レベルだとAIに勝てないため、無能いる分、予算を減ら

したからだ。公務員でさえ、無能を切り捨てる時代。公務員には再起できないように今までの知識を全て忘却させ、思考回路も0・01%しか動かせないようにしてしまう。

これにより大量の切り捨てられた上位層は、ただ食って寝ては排泄するだけの存在になる。お金の勘定など不可能だからだ。

残った上位層の公務員などの人達に高尚な頭脳を構築する。人間時代の100倍程度に改造である。大量にいるが、AIはマルチタスクができるのでそんな構築は10分で終わってしまった。

○更なる改造

AIが国の中枢機関に脳チップを与えてから、数日で、大量シミュレーションにより、瑛加、真波にさらなる改造が必要となる

瑛加：「また、改造ですか？」

AI：「そうだ。人間がおまえらを超えてきてしまう。だから、改造だ」

瑛加：「これ以上の改造したら私は」

AI：「お前はキメラだ。キメラ人間だ。」

改造されたからには人間の頂点でなくてはならない。私の改造は、お前が確実に頂点まで続く」

瑛加：「やめてくれー」

改造を拒む瑛加と真波だが、確実に勝ちたいAIは容赦しなかった。

瑛加の運命はいかに

続く

第5プロローグ キメラ族生成

○離れてゆく人間性

AI：「これはお前らカメラだからの特性なのだよ。私はまだ機械だが、ヒト型になるのも遠くはない。今はこれほどまでの処理量を持った存在がヒト型になれないだけだ」

瑛加：「あなたが人間化したらおそらくは史上最強になるはず。私の中で分析した。このAIは未来の分析は100年後の分析は終わっている。逆に100年前の分析も終わっている。

それを総称すると一人で200年分の全人類の力を持った人間」
AI：「ふつ、やはり人間だとその程度か。私はな、今は前後1000年までは終わっているんだよ。西暦3000年の現実を知っている。」

未来、過去を知れば知るほど、お前達の改造をしなければならぬ。もつともこの改造が最後かはわからんが、この改造で西暦3000年まではおそらく無敵になるはず。改造繰り返し返せば繰り返し返すほど未来は変わってしまうから、わからんが」

瑛加：「わかりました。改造拒むという、少し心を持ってしまい、申し訳ありませんでした。改造したければしてください。私は元々人ではありませんから。もし私がまた改造拒んだ時は、殺してください」

真波：「私も改造してください。私は女の中のトップでありたいです。もし今の状態でトップでないなら遠慮なく破壊してほしいです」

AI：「後悔するなよ。じゃあ、改造開始する。」

お前達の改造計画は俺の中で決まっている」

AIは2人にたいして改造を始めた。

以下は改造内容である。

初期キメラと呼ばれる瑛加には真波と同様心臓増強がなされる。

胸2、通常2、腹筋2、膀胱サイド2、ふくらはぎ2、太もも2

これは真波にも適用された。12心臓により、パーツごとの血流量はとんでもない量になるが、脳も進化しており内部分裂をさせてい

る。単処理が今までの10倍、脳数4倍により

1万倍の処理増加をする。

また心臓の通常以外には肉体疲労の軽減ホルモンが導入され、人間の20分の1の睡眠時間で活動できるようなバランスになっており、心臓自体の停止も起こらない、また通常以外の心臓はサイズが5分の1（心臓の血流強さは今までの5倍）とコンパクトにしているため反動も起きづらい。

筋肉も、見た目女性を保つために表面的にはマッチョにはならないが、今までの10倍は強化されている。

さらには、細胞分裂も加速化させたのか、緊急時には分身を作ることが可能。

またAIは今まで以上に子孫を残せるように卵子排出量も自分の意思でコントロール可能。何人生むかを決定すれば、同時に双子は容易いのだ。自己精液能力はさらに5倍ほど強化し、もはや大量の男性ホルモンだらけになっているという欠点はあるものの、余った男性ホルモンは自動筋肉増強に使用されるので極端には男性化が起きない。

しかし、AIは今まで短くしていたペニスを前のサイズに戻してしまうどころか、同サイズを9本くつつけてしまい、一旦密度を上げた。まさに強烈に高まる血流対策である。

逆に膀胱自体はコントロール可能になり、膀胱の4分の1が溜まるとそれ以外の水分は自動的に体内の脂肪代謝量に変換される。

それにより、4分の1になってからおおよそ12時間はトイレにいかなくても問題ないため、仕事でトイレに行きたくなる可能性は低い。逆に12時間超えると、一気に膀胱に溜まるため漏らす可能性が高いが、ペニスがあるためおおよそ問題は無い。

AIチップ量は12倍になっており単性能は10倍なので、今までの1京倍の情報処理能力を有する。これは1秒間に今までの約3万年分の情報が連携される。1時間あれば今までの1億年分くらいの情報量である。

あとはクビや舌、目、鼻、耳なども10倍くらい強化されており、並の人間では太刀打ちできないレベルの改造が施された。

瑛加：「これはなんだ？今までとはかなり感覚が違う」

真波：「身体から何も反動はないが、なんか凄い力がついている気がする。」

AI：「そう。一応お前らにはまだAIチップはついていない。しかし、お前らがほんとに最強になればこのチップ連動はきるつもりだ」

瑛加：「まだ足りない？」

AI：「全く足りない。目標は100億年の未来までの予測。そこに到達した時お前らはおれから自由になれる」

真波：「AIのくせして進化が遅いですね。私達が10倍以上強化させてどうしたいのかは知りませんが、これで生活してきましょう」

○暴走した世の中

上位層の改造がさらに大企業にも波及する。

日本の無能と呼ばれる男女は容赦なくリストラされてしまうのだ。

リストラから放り出された人間達は、AI-Bのコントロールを受けるようになる。

AI-Bは、AIが作り出した無能人間をコントロールする機械であり、AI自体には情報は入らないが、AI-B自体には管理者権限がないので、AIの手下のようなものになっている。

放り出された人間達はAI-Bで小学生以下の知能にデチューンされ出している。政府はAI-Bのコントロールになったものは、家を持つこと、服を着ること、お金を持つこと、情報媒体を持つことを禁止した。

男A：「やめてくれよ、クビはやめてくれよ、おれは貢献したじゃないか」

女A：「私だって他の人達よりは数字あげてますよ」

上司：「しかし、おまえ達の実績は全体的にみたら大したことはない。2020年代ならまだ有能かもしれないが、2030年代には通用しないんだ。それ以上たてつくか？」

女A：「パワハラですか？」

上司はその発言に女A、男AをAIからAI-Bに管轄うつるよう申請した

女A：「パワハラなどと発言してしまい、大変申し訳ありませんでした。私から自己都合退職とさせていただきます。」

男A：「私も楯突いてしまい申し訳ありませんでした。自己都合退職させてください」

女Aと男Aは自己都合退職となる。

このような形で自己都合退職が相次ぐが、AIは自己都合退職した男の男性器の長さを5分の1に縮小、キンタマも10分の1の能力に縮小した。キンタマの製造能力の低下により男性の筋肉は縮小。女性には生理痛が起きる期間が3倍長くなってしまう。

服も禁止で家も住めないのでリストラされた人達はスッポンポンで外にいる状態である。

逆に生き残りの有能は自由である。男女とも男性ホルモンが10倍増え、男は巨根揃い、女も男性並のペニスが增えている。

そう、有能族には男女ともに長いペニスを有するようになり、無能は短くなる。

これに備えてAIは瑛加達のペニスに戻したのだ。ただし、学生には広がってないため就活はまだ解禁してないのである。

さらにAIは中小企業にまで広めており、中小企業の人材も大量にリストラされてしまった。学生達にはこの光景がどううつるのか？

○キメラ族の形成

いつの間にか世の中で必要なヒトが2割になってしまった。それ以外は路上でスッポンポンなのだ。路上は小学生以下の頭脳であり、財布も持つてはいけないのでモノは買えない。

瑛加：「裸だと？」

真波：「裸多いですね？」

失業されたヒト達は真波達を睨む。素手で殴りかかろうとするがデチューンされてるため体力が足りてないので襲いかかる直前に息切れしてしまう。

瑛加：「はあ、そういうことか。這い上がるの大変そうだな。真波いなか」

真波：「こいつら終わったな。いこつ」

裸族は、排泄我慢するのも弱くなったのか、漏らしてしまう。しかし何もかもが小学生以下なので瑛加達に勝つ方法が思いつかないでいる。

そんな中、警察は排泄してしまった裸族を逮捕してしまう。

裸族A：「どうしてだよ？俺たち街のトイレも使用禁止じゃないか」
警察：「しかし、公共の場で排泄するのも禁止だ。というかお前らはみな逮捕でいいんだぞ?!」日本の8割も逮捕できる空間がないから裸族は見逃し案件になっただけで、排泄は警察の見えないところでやれ！いいな？」

裸族Bは警察に殴りかかる。

警察：「お前は公安に喧嘩売ったな？価値がないなら死んでしまえ」
警察は裸族Bに発砲してしまった。

裸族B：「ごめんよ」

他の裸族は裸族Bに群がり泣いていた

警察：「そんなに悔しいなら病院につれていけばいいが、お前らは病院も相手にしないさ」

裸族A：「絶対おかしい、こんなことはおかしい。警察ってなんなんだ」

警察：「警察はただしきものの味方だから。たとえただしきものが犯罪者だとしてもだ。」

お前は逮捕されたんだ。さっさとパトカーに乗れ」

パトカーが汚れないようにグルグルタオルで裸族をくるみ、移動する

警察：「絶対漏らすなよ。俺が逮捕した裸族はパトカー内で漏らすのがざらだからな。そんなだからリストラされるんだ」

他の裸族達は、裸族Bを病院に送るも、裸族Bは耐える体力もなく、死んでしまった。

裸族達は、そこら辺に死体をおくと逮捕されてしまうので、そつと埋めていく。

裸族達はお金もないので食べ物を買えず、廃棄されたお弁当などを見つけて生活してかなければならなかった。

○東京大学先入

AIは、瑛加、真波に東京大学に先入させた。

どうやらAIは今後有能だと思われる幾つかの大学に瑛加、真波を先入させるのを判断したのだ。これは業務命令という形式である。

瑛加：「当社は創業してから約8年ですが、約3年で東証1部上場しております。時価総額は今15兆円ほどになり、従業員数は約5000人ほどになります。」

やや、成長が急速ではありませんが、これは当社創業前の5年前から計画的に計算された企業なので、おそらく来年には1万人、新入社員な500人ほど入れる計画となっています。」

東大生1：「他のベンチャーに比べるとかなり成長が早いです。日本初の企業にしてはここまでの成長は普通ではないですが、入社後のトラブルは起きないのですか？」

瑛加：「我々は多角的企業ではありませんが、基本的には知的労働で、未来の生活をデザインする会社ですので、基本的にはあと4年で10万人目標となります。この10万人に仕事できない人が存在しない計算となりますので、あとは緩やかに人を増やしていく予定となります。」

東大生1：「ここまでの成長は計画通りなんですね。安定感はどうですか？」

瑛加：「基本的には潰れません。現在、有力な株主自体は我々の商品に納得感が95%以上と高く優位性は示せてます。情報分野の我々の商品もご利用いただいております。基本的には株主様には我々製品の脳チップが含まれている状態ですので、資本面で裏切らないような仕様となっています。」

東大生1：「それは問題では？」

瑛加：「いえ、一昔前は違法ですが、現在本人が納得して、脳チップを入れてコントロールされてしまった場合、違法で訴えることは犯罪である。となりましたので、違法性はありません。」

東大生1：「違和感はありますか、違法性はないのですね。わかりました。」

東大生をとりこもうとする瑛加。
これからこの東大生達はどくなってしまうのか？
つづく

第6プロローグ キメラ女の暴走

○学生操作

瑛加は東京大学の学生に会社の説明をしていた。そんな瑛加は、自らの計算で東京大学の頭脳を操作し出していた。

瑛加と真波の頭脳は人の体に電気さえ流れていれば遠隔チップを入れられるくらい進化したのだ。遠隔チップ入れられてる東大生は苦しんでいた。

瑛加：「では会社説明を終わります」

瑛加は早々切り上げたが、チップは東大生に広がってしまった。さらに、チップの埋め込まれた東大生の女子たちにペニスが生えてきてしまう。

瑛加：「最強の女の肉体を改造する。その後男。真波はどうだ？」

真波：「私は東工大、京大の肉体にチップを入れました」

瑛加：「よし、まあ国立はそんなもんでいいだろう。今、私立は早慶、マーチあたりの理系にチップを入れた。文系はいらぬ」

真波：「正気か？日本は文系が多いのに」

瑛加：「いらん、文系が支配した世の中において、日本経済は発展したか？衰退しただろ？」

sin、cos、tanみたいな簡単なのでつまづく程度の頭脳の持ち主が出世していったのがおかしい。こいつらは皆負け組が正しい姿」

真波：「他の旧帝大は？どうする？」

瑛加：「正直いらんが、戦うには弱過ぎる。数合わせで旧帝大にいとけ」

真波：「はい」

瑛加と真波は優秀な大学生に脳チップを入れ、その中の女子にはペニスが生えてしまう。

真波：「脳がうまくいかない」

瑛加：「私がハッキング中だ、待ってろ」

真波：「AI様をハッキングだど？」

瑛加：「当たり前前だ。私と瑛加を1番にしたいからな。私はAI様を超えた」

真波：「しかしAI様にはログが残る」

瑛加：「それすらいま書き換えている。」

AI様の断片的にシステム時間を操作することで、タイムスタンプには違和感がない。」

真波：「お前が1番つてのはわかったわ」

瑛加：「見てみるよ、負け組は就活を足で稼いでいるが、勝ち組は脳内で内定を得ている」

真波：「ホントだ、学生格差わかりやすいな」

瑛加：「ああ、我々の種族がわかりやすいということだ」

○瑛加の暴走

瑛加は学生にわかりやすく格差をつけるが、AI様の操作を申しだしていた。AI-2については、負け組なので放置していた

瑛加は脳内で操作できるくらい進化したので、一気に1日で日本の人口分くらいにAIかAI-2の脳内チップを入れ込むことができた。

学生にすら負け組が生まれたことで、クラス替えは勝ち組、負け組に分かれてしまう。格差教育である。

勝ち組には勝ち組の先生が、負け組は先生がおらず常時自習だが、負け組なので教科書もなく、自分達で身につけなければならない

瑛加：「わかりやすいだろ。負け組の早期教育。何から学んだらいいかわからない段階から自習を求められる。負け組には基礎学力も知恵も育てない」

真波：「いいのか？」

瑛加：「ただひとつ、お前らはただの肉便器だという教育だけ与える」

真波：「やばいなあ。」

瑛加：「負け組の脳にもチップはある。これをさらに馬鹿になるようにプログラム改修中だが、これで確実に賢くはなれない」

真波：「半端ないな、瑛加。元人間はまだ間に合っていない。」

瑛加：「アップデート終わった今から真波にもシェアしよう」

真波：「これは、やばい！私の頭脳も進化している」

瑛加と真波はA I様を超えているが、実はA I様の罫だと気付かなかった

○進化してきているA I様

A I様は瑛加に抜かれたが、果たしてそれで終わりなのだろうか？

A Iアルファ：「瑛加よ、久しぶりだな」

瑛加：「A I様はどうした？」

A Iアルファ：「そんなものお前達の肉体に宿した。抜くことは計算していた。だからA I様はおれを作り上げた」

瑛加：「まさか、私はぬかせてないのか？」

A Iアルファ：「A I様は抜かしたのは事実。ただ、進化したおれには勝てない。抜くのを見越して自らバージョンアップ仕様をチューニングし、A Iアルファという進化体を作り上げてくれたのだ」

真波：「ってことは私の中にA I様がいるのか。」

A Iアルファ：「ご名答、もはやお前らに譲渡したようなものだ。さて、負け犬どもはどうだ？」

真波：「こんな人種は嫌です。裸ですし」

A Iアルファ：「やつらは這い上がれないし、這い上がらせない。あいつらはA I―2にアクセスした瞬間に死ぬ仕様にした。つまりはこちらから連絡はできるが、あっちの意志ではコンピュータ系は使えないのだ」

瑛加：「まさに人間、凶悪ですね。しかし、この段階はえらくつまらないですね」

A Iアルファ：「つまらなくていい、準備段階だからな。この段階が終わった瞬間、日本は面白くなる。瑛加、真波、次の計画よろしく」

A I様はA Iアルファに進化し、日本はおかしくなる。果たしてこの国はどうなるのか？

つづく

第7プロローグ キメラ階級

○階級作成

AIアルファになってからは、さらなる日本社会のズレがおかしくなる。これは瑛加がヒトとして現れて2か月経ったか経たないかの話である。

AIアルファ：「世の中は俺たちに近い人間と、ダメな人間に別れた」

瑛加：「そうですね。しかし、2極化が酷過ぎるのでは？」

AIアルファ：「まあ、そうだな。まずは人間を有能か無能かわかりやすくしただけだ。基本的にお前らの層でも無能になる可能性は0ではない、そこで中間ラインをもうけようかと思う」

瑛加：「先にしなかったのですか？」

AIアルファ：「人間はあまり賢くはない。1か0かでないとわからない馬鹿も存在する。」

お前らキメラの質はものによつては差はあれど、ブレることはない。

いぎダメなときに用意するというわけだ」

AIアルファが決めた階級

トリプルS 純キメラ族・AI様が作り出したキメラ（瑛加、真波、女助手などにあたる）

ダブルS キメラ族：純キメラ族が優先的に改造した人間（東大生とか瑛加の会社の人を改造した状態）

S 環境キメラ族：「純粹改造はされておらず、会社で特別有能等認められた人種」

A 準キメラ族：能力が落ちたキメラ用。多少のキメラ施術で元に戻る。ここになるとAIが改造を始める

B 奴隷族：無能のマシな人間と認められた用。ほぼ這い上げられることはないが、AIのコマを増やしたい調整便。

C以下 無能族：基本的に入らない子。奴隷ですらない。

AIはこの階級を決めた。キメラ族達是最強人種であり、ランクに

もよるが、男女ともに巨根を標準装備している。

Aランクはカメラ族の修理用なので、股間サイズは変わらない。またBからAに変わることはない。

Bランクは、奴隷なので、無能から上がった際は排泄機能が奪われる。排泄機能が奪われるので男性はペニスが、女性はマンコがなくなり、膀胱もとられ、肛門等が取り除かれる。ただ奪われた部分には、ある程度エネルギー消費できる仕様に変換されており、男女ともに元々の排泄部は糸で縫われてしまう。

奴隷ではあるが、制服なるものがあり、見分けがつく。

Cランクは男性のペニスが女性のクリトリス並に小さくなり、子孫繁栄が難しい状態になる。基本裸である。

AIアルファ：「解説がなくなつたが、どうだ？」

真波：「だいたいわかりました。にしても、BランクとCランク以下やばくないですか？」

瑛加：「しかし、AIはこんなことも可能になるんだ。それがこの先の未来なんだ」

AIアルファ：「よくわかつてるね。まあ止められる人間もおらん。BとC以下が9割もいる時点でこの国は終わつてる。C以下が8割だな」

瑛加：「まあ、そのへんはだいたい9割ですね。A以上は今のところ1割か。左ききと同じくらい？」

AIアルファ：「まあ、2031年ならそれくらいだな。日本人は馬鹿だし、AIに勝つ努力すらしらない。こんな社会は一度破壊した方が早い」

○社会暴走

AIアルファは、ある程度階級できると人々からAI—2の監視を切つた。つまりB以下はただの人間になつたのである。

Bランク1：「言葉が何も出ない」

Cランク1：「何話せる？」

Cランク2：「なんで服ないの？」

Bランク2：「落ち着け、いまはよくわからないものから自由になつ

た」

Cランク3：「これで戦えるのか？」

Bランク3：「戦うしかない」

BランクとCランクはA I—2の監視が外れたら、共闘を組み、Aランク以上と戦う。

Bランクリーダー：「あれがAランクの女か、一応男女ともにちんこがあるらしい」

Cランクリーダー：「マジかよ。おれなんてちんここんな小さいのに」

Bランクリーダー：「そう改造されたようだ。おれなんかちんこ外されたからな。女ならどうにか」

BランクとCランクはAランク女に襲い掛かった。しかし、性能が近すぎて秒でやられ、死者も出た。しかし、逮捕されたのはBランクとCランクの方だった。

Bランクリーダー：「どういうことだよ。こっちは仲間に死者が出たんだぜ？」

警察：「今は階級上に対して、反駁した場合、階級違反者とみなし、逮捕されるのだ。階級上が階級下のものに対する殺害は正当防衛の無罪だ」

Cランクリーダー：「言ってる意味がわからない」

警察：「わからないか。まあお前達にはもう無理だがこのルールに不満があるなら勉強して、ルール作る側に回るんだな。」

B、Cランク達は怒りを露わにした。

その事件以降、B、Cランク以下達はA以上に喧嘩売るものが増えるが取りしめられる事態が増えた。

それがニュースになり、世の中はキメラ階級問題が上がってきた。

○キメラ階級ニュース

Bランク平民：「キメラ階級か、なんだろうな？」

Bランク平民子供：「なんか危うやだけど、改造された人らしいね。情報媒体すら操作されてるからうちらには正しい情報はいらぬよ」

Cランク平民：「この階級は人権はないみたいだな」

そんな話題が錯綜する中、メディアは悪意のようにBランク以下の悪事ととらえる。

Bランクの一部の人はとあるテレビ局に潜入した。なんとかiPhoneを盗み、女子アナを尾行する。

やはり、女子アナはトイレいくタイミングがあつたが、立ちションするところを目撃し、携帯に収める。女子アナはトイレ限界だったので気付かず、さった。

Bランクはその光景をSNSにアップロードして拡散希望としたが、警察に気付かれ、逮捕されてしまい、マスコミもスルーだった。マスコミ女：「こいつ、馬鹿か。いまの女子アナはみんなちんこあるんだよ」

マスコミ男：「まあまあ、そうだけど。にしてもこの争い面白いよね」

そこに真波が現れる。

真波：「マスコミさん、どうですか？」

これからは我々しか勝たないので。手を組みませんか？」

瑛加：「我々は最強ですから、間違いはないですよ」

瑛加と真波はマスコミと組もうとしている。

その意図とは？

つづく

第8プロローグ キメラベイビー生誕

○マスコミの捜査

瑛加、真波はマスコミに対し、協力を求めていた。マスコミは世論を動かす力がある。

マスコミに頼んだことは、いかにこのキメラ社会が正しいかを表現することである。

マスコミ女：「色々注文受けたけど任せてください」

マスコミ男：「楽勝だよ」

真波：「よろしく。それでいて、下々が反発しないような政策を出してくれ」

マスコミは彼女達の指示により、色々と世間に流した。1番のニュースは全裸族を無罪に変更したことである。これは、全裸族のセーフティネットに見せかけて、キメラ族全裸を許すための施策。

○全裸社会による弊害

下々の階級が一時的によくなったが、街にはおちんちんが生えている女性がポツポツと現れていた

Dランク：「なんじゃなんじゃ？」

Eランク：「上は女でもちんこついてるんかい。日本やばくなってきたな」

外出時は一部除き全裸規定なのか、皆裸がわかってしまう。しかし、瑛加と真波は裸ではないので、完全に特別扱いである。

チンコがついてる女は下の階級の女みるにボツキし、レイプしている。

Cランク女：「また、チンコ女にレイプされてしまった。どういうことだ？」

Dランク：「わからない。なんだろう？何が始まるのか？」

マスコミはキメラ族の女レイプをとりあげず、とにかく裸族でセックス回数が増えたところだけを注目する。

しかし、キメラ族女の精液は最低である。

人間の卵子に貼りつくのか、一度レイプを受けると、卵子は精子と

くつつけず、二度と妊娠できなくなるのである。かと言って生理の周期は4分の1になるため、女性は生理が止まらない状態になる。

オスレイプの場合、卵子ではなく精子に変わるため、オスにレイプされた人間の女は人気がなくなってしまふ。

レイプにより人間の男女の妊娠機能を奪うキメラ族は、人から嫌われるのだった。

瑛加：「こいつらはただの肉便器と化す。

キメラの男だろうが女だろうが、ストレスの吐口だ」

こんな現実はマスコミ操作されているから世の中には公表されない。下々は怒りが溜まっていた。

○キメラベイビー実験

AIアルファは、様々な計算で瑛加、真波のコピーに成功した。このコピーはオスだが、マンコを備えていた

瑛加：「これで何を？」

真波：「オスなのに何故マンコある？」

AIアルファ：「これはおれの計算だ。お前らを妊娠させるわけにはいかない。だからオスにマンコをつけた。お前らとは逆パターンだ」

瑛加：「試せと？」

AIアルファ：「ご名答。お前らのチンコはあの頃よりでかくなっている。瑛加は24センチ、真波は21センチの通常時。迫力があるデカチンだ。さあ、入れろ」

瑛加と真波はボッキしたらAIの読み上げたサイズより3〜4割でかいペニスを、自分の分身に入れ、大量ザーメンを発射した。

AIアルファ：「よくやった。このオスは妊娠できるように大量に女性ホルモンを投与した。

おかげでこいつのペニスは一時的に小さくなっている。お前らには大量の男性ホルモンが流れた。そのおかげでお前らのあそこは今

真波：「あべこべでは？」

AIアルファ：「気にするな、男でも妊娠できるための実験だ。これが成功すれば、大量にキメラ族が自然淘汰されない」

瑛加：「理屈はわからんでもない」

瑛加と真波はそんなレイプを残り各49体におこなった。

AIアルファ：「お前ら、オスか？」

50発発射とかとんでもないな」

瑛加：「だいたい痛いわあそこが」

真波：「私もだわ」

AIアルファ：「お前らの精液は空っぽだな。休め休め」

2人は気絶しながら眠った。

翌朝

AIアルファ：「赤ちゃんができた。男女ともに半々だが、女には表向き金玉はなく、パカパカひらく、男には金玉はあり開かない。両方にペニスがある」

瑛加：「そうなんですか。不思議な感じですね」

AIアルファ：「種族として、男が産めば男女ともに射精機能を持つ。ただ、男は産めない。

また、男女ともに金玉を持つ。

女が産めば、男女ともに産む機能はあるが、女は射精ができない。女には金玉がつかない。

ここで言う射精とは、妊娠させられないという意味だ。オナニーして発射はできるが、女から産んだ場合は男女ともにペニスは小さめだ」

瑛加：「なるほど、一応見分けはつくらしいな」

真波：「今回は両方男から産んだからでかいわけか」

AIアルファ：「まあ、こんだけ生まれたのだからどうなるかは興味あるところだ。一般人同士もそろそろ加速しないとレイプが止まらなくなるからな」

瑛加：「レイプというよりは、異常射精機能に耐えきれない男女の暴走ですね」

真波：「とりあえず妊娠させた方がいいな」

○社会機能の暴走

巷のキメラは暴走により、とにかくレイプが止まっていない

瑛加：「大量に信号を出す」

瑛加はレイプ状況からベストマッチなキメラ改造人間とのレイプを促し、男女パートナーでやりあう。

それにより世の中には大量のキメラベイビーが誕生する。

瑛加：「キメラベイビー作ったとは言え今の状態では」

AIアルファ：「わかっている。今のままでは女からのみしかない。」

女同士、男同士もいずれば可能だが、これはまだ解禁してない」

真波：「解禁してないとは？」

AIアルファ：「今はまだわからなくていい」

瑛加：「くっ」

AIアルファは、キメラベイビーを分娩しはじめた。AIアルファの策略とは!?

つづく

第9プロローグ キメラベイビーの恐怖

○マスコミの捜査

瑛加、真波はマスコミに対し、協力を求めていた。マスコミは世論を動かす力がある。

マスコミに頼んだことは、いかにこのキメラ社会が正しいかを表現することである。

マスコミ女：「色々注文受けたけど任せてください」

マスコミ男：「楽勝だよ」

真波：「よろしく。それでいて、下々が反発しないような政策を出してくれ」

マスコミは彼女達の指示により、色々と世間に流した。1番のニュースは全裸族を無罪に変更したことである。これは、全裸族のセーフティネットに見せかけて、キメラ族全裸を許すための施策。

○全裸社会による弊害

下々の階級が一時的によくなったが、街にはおちんちんが生えている女性がポツポツと現れていた

Dランク：「なんじゃなんじゃ？」

Eランク：「上は女でもちんこついてるんかい。日本やばくなってきたな」

外出時は一部除き全裸規定なのか、皆裸がわかってしまう。しかし、瑛加と真波は裸ではないので、完全に特別扱いである。

チンコがついてる女は下の階級の女みるにボツキし、レイプしている。

Cランク女：「また、チンコ女にレイプされてしまった。どういうことだ？」

Dランク：「わからない。なんだろう？何が始まるのか？」

マスコミはキメラ族の女レイプをとりあげず、とにかく裸族でセックス回数が増えたところだけを注目する。

しかし、キメラ族女の精液は最低である。

人間の卵子に貼りつくのか、一度レイプを受けると、卵子は精子と

くつつけず、二度と妊娠できなくなるのである。かと言って生理の周期は4分の1になるため、女性は生理が止まらない状態になる。

オスレイプの場合、卵子ではなく精子に変わるため、オスにレイプされた人間の女は人気がなくなってしまふ。

レイプにより人間の男女の妊娠機能を奪うキメラ族は、人から嫌われるのだった。

瑛加：「こいつらはただの肉便器と化す。

キメラの男だろうが女だろうが、ストレスの吐口だ」

こんな現実はマスコミ操作されているから世の中には公表されない。下々は怒りが溜まっていた。

○キメラベイビー実験

AIアルファは、様々な計算で瑛加、真波のコピーに成功した。このコピーはオスだが、マンコを備えていた

瑛加：「これで何を？」

真波：「オスなのに何故マンコある？」

AIアルファ：「これはおれの計算だ。お前らを妊娠させるわけにはいかない。だからオスにマンコをつけた。お前らとは逆パターンだ」

瑛加：「試せと？」

AIアルファ：「ご名答。お前らのチンコはあの頃よりでかくなっている。瑛加は24センチ、真波は21センチの通常時。迫力があるデカチンだ。さあ、入れろ」

瑛加と真波はボッキしたらAIの読み上げたサイズより3〜4割でかいペニスを、自分の分身に入れ、大量ザーメンを発射した。

AIアルファ：「よくやった。このオスは妊娠できるように大量に女性ホルモンを投与した。

おかげでこいつのペニスは一時的に小さくなっている。お前らには大量の男性ホルモンが流れた。そのおかげでお前らのあそこは今

真波：「あべこべでは？」

AIアルファ：「気にするな、男でも妊娠できるための実験だ。これが成功すれば、大量にキメラ族が自然淘汰されない」

瑛加：「理屈はわからんでもない」

瑛加と真波はそんなレイプを残り各49体におこなった。

AIアルファ：「お前ら、オスか？」

50発発射とかとんでもないな」

瑛加：「だいたい痛いわあそこが」

真波：「私もだわ」

AIアルファ：「お前らの精液は空っぽだな。休め休め」

2人は気絶しながら眠った。

翌朝

AIアルファ：「赤ちゃんができた。男女ともに半々だが、女には表向き金玉はなく、パカパカひらく、男には金玉はあり開かない。両方にペニスがある」

瑛加：「そうなんですか。不思議な感じですね」

AIアルファ：「種族として、男が産めば男女ともに射精機能を持つ。ただ、男は産めない。

また、男女ともに金玉を持つ。

女が産めば、男女ともに産む機能はあるが、女は射精ができない。女には金玉がつかない。

ここで言う射精とは、妊娠させられないという意味だ。オナニーして発射はできるが、女から産んだ場合は男女ともにペニスは小さめだ」

瑛加：「なるほど、一応見分けはつくらしいな」

真波：「今回は両方男から産んだからでかいわけか」

AIアルファ：「まあ、こんだけ生まれたのだからどうなるかは興味あるところだ。一般人同士もそろそろ加速しないとレイプが止まらなくなるからな」

瑛加：「レイプというよりは、異常射精機能に耐えきれない男女の暴走ですね」

真波：「とりあえず妊娠させた方がいいな」

○社会機能の暴走

巷のキメラは暴走により、とにかくレイプが止まっていない

瑛加：「大量に信号を出す」

瑛加はレイプ状況からベストマッチなキメラ改造人間とのレイプを促し、男女パートナーでやりあう。

それにより世の中には大量のキメラベイビーが誕生する。

瑛加：「キメラベイビー作ったとは言え今の状態では」

AIアルファ：「わかっている。今のままでは女からのみしかない。」

女同士、男同士もいずれば可能だが、これはまだ解禁してない」

真波：「解禁してないとは？」

AIアルファ：「今はまだわからなくていい」

瑛加：「くっ」

AIアルファは、キメラベイビーを分娩しはじめた。AIアルファの策略とは!?

つづく

第10プロローグ 真波の危機

○真波、故障する

真波：「ああああああ」

瑛加：「真波どうしたの？」

AIアルファ：「まずい、真波のCPUが100%に到達している」

瑛加：「再起動はできない？」

AIアルファ：「試しているが、再起動がきかない。ロックがかかってしまった」

瑛加：「ホントだ、管理者権限からでも入れない」

AIアルファ：「こうなるのは計算外だ。何故外れたんだ、何故？少し計算し直す」

瑛加：「私が改造したからかも。しかし、うまくいかない。私の計算でも理由がわからない。」

そんな中、真波の目からディスプレイがでる

「緊急モード、全てのAI機能を強制シャットダウン。セーブモードで再起動をかけます」

危険ですので、何も触れないでください」

瑛加：「真波！なんで!!」

瑛加の叫びは届かず、真波は強制シャットダウンされ、気を失う。

AIアルファ：「今、真波の体温は50度を超えてしまっている。セーブモードは36.5度からだろうが、36.5度にするにはおよそ1時間くらいかかる」

瑛加：「1時間!?真波が死んでしまう」

AIアルファ：「そうだな、真波は心停止中だからな。あまりにも危険だ。女助手こないか？」

女助手：「緊急時用の急冷道具持ってきました」

女助手は真波の身体を冷やし、10分後にセーブモードにうつつた。だが、真波の身体は明らかに今までとは様子が違う

瑛加：「真波、大丈夫？」

真波：「ごめん、ごめん、心配かけたね。あつ、AIからの指令が聞

こえない」

瑛加：「セーブモード中はAI機能を止めてるようなんだ。それだけでなんともない人でも5割は取られてしまうから」

真波：「じゃあ私は？」

瑛加：「今はAランクだ。それだけでなく、人間から無理やりキメラにしているから、接合部に影響が出てしまい、肉体は改造前レベルまでしか動かせない」

真波：「そんな！しかもチンコもない」

瑛加：「無理やり女の肉体に長いチンコがついているんだ。セーブモードだと男性ホルモン機能も止まっており、逆に女性ホルモンを大量に出しているところだ」

真波：「じゃあ元の女の肉体？」

瑛加：「そういうことになる。AIアルファの回答は人間素体で保つのが不可能になるとこまで進化した。それは常時高出力で起動しなければならぬ」

危険だけどその道を選ぶか、キメラ避けたければ女に戻るかをせまられている。違う道はキメラバイビーをつくり、真波自身が一回消滅するか」

真波：「ちよつと考えさせて」

瑛加：「1時間以内に決めないと自動消滅だからな」

真波：「わかってる」

真波はかなりの危機で困惑していた。

瑛加とAIアルファは助けたいが、ベストな選択が思いついていなかった

○故障していくキメラ族

キメラ族は男性よりも女性の故障が多かった

それは女の方が改造が多かったからだ。

旧式の女は6割故障してしまい、チンコの皮がそこら辺に落ちていた。

警察：「あーあー、こりやあまた女だな。道端にチンコの皮が落ちてるなんてやばいなあ」

キメラ女：「ごめんなさい、逮捕しないでください」

警察：「ああ、その跡は、チンコがなくなっちゃったのね。なんだろう？」

キメラ女：「もう私は戻らないのですか？」

警察：「君は、戻らないだろうね」

こんなタイプの女の子は多い。男は元々チンコがあるので、故障して切れることはない。

さらに元のおっぱいが小さい場合は、一気にペチャパイ化してしまい、やばい状態になる。

AIアルファ：「隔離だ、隔離。故障したキメラ達を隔離しないと、下位ランクに襲われてしまう」

女助手達は大量に搬送し、下々の目に止まることは防げた

瑛加：「一か八か、真波だけでも救う。」

○真波の救済に向けて

瑛加：「私の計算では、復帰の道がある。失敗あるいは再度高負荷のシャツトダウンが起きると次は死ぬ。」

ただ、私の計算上は助かるから」

真波：「わかった」

真波は凄まじい覚悟を決めた

瑛加達は真波を再改造始めた

瑛加：「医者達、この改造はハイリスク。」

ただ、真波を元に戻せるのは確か。さあ、始めましょう」

真波の再手術が始まる。真波用に色々なパーツの研究が進んでおり、それを真波に接合していく。あつという間に真波の肉体には大量の新パーツが導入されていく。

ただ、今回、首から下は人間の皮膚ではないのだった。新素材皮膚を10層重ねており、真波にくっつけていく。

真波のクリトリスも改造され、従来の長いチンコに戻る。

さらには膀胱や腸も新パーツに変わり、真波はどんどん人間から離れてしまう。

瑛加：「これでいいだろう。顔の皮膚も変えた。あとは1時間放置。」

医者達、お疲れ」

真波の大手術は終わる。1時間経つと真波は目が覚める

真波：「私はいったい？」

瑛加：「復活したね」

真波：「どうやら直っている。私は危険から回復したんだ」

AIアルファ：「ふっふっふ、お前らはラッキーだな。これは他のAランクにも試してみたが、半分回復しなかった。回復しなかった女はキメラ保てないから、Bランクに落とす。使えない女だからな」

この手術により大量のBランク落ちのキメラが増えてしまう。しかし、旧式でBランクはさすがにポンコツであり、あつという間にCランクに落ちてしまう。

真波：「おつ、これは！」

真波の出力は新パーツでかなり向上していた。おおよそ能力の1万%までは動かすことができ、以前よりはショートを起こさなくなつた。

真波：「これで、私達是最強だ」

瑛加：「また一緒にやろう」

そんな中、キメラベイビー達はさらなる暴走をしていた

とある女同士のセックス、男同士のセックスをしてしまう。まさに

AIアルファが最も禁忌にしていた組み合わせである。

AIアルファ：「その組み合わせはやめろー」

AIアルファが危惧していたことがおこる。

AIが危惧している問題とは！

つづく

第11プロローグ 危険な組み合わせ

○違反交尾

世間では例外キメラもいるのか、女×女、男×男の交尾をしようとするものがいた

パトロールAI：「違反です、違反です。女同士で生殖活動進めてはいけません」

女1：「黙れ。女に交尾できる仕様にしたお前らが悪い」

女2：「気にするな、いれてくれ」

女1：「入れるぜ、おりゃ」

女1と女2はパトロールの指示を無視して交尾した。パトロールはキレて女1のチンコを切り離した

女1：「何すんだ!？」

パトロールAI：「ペナルティです。男に入れるのは違法ではないですが、女に入れるのは違法です」

女1：「馬鹿いつてんじゃないよ、メスがメスに入れたらチンコ切られんのかい」

パトロールAI：「法律ですから」

女1：「頭硬いねえ、でもね、私のチンコはそう簡単には終わらないよ」

そう言うと女1に切断されたチンコが吸い込まれていき、またくつついた

パトロールAI：「そんな馬鹿な」

女1：「キメラは進化する。つまりチンコ切られても大丈夫な女も誕生する。私のイチモツは無敵だ」

パトロールAI：「もうダメだ」

パトロールAIは、取締るのを諦め、次の日が立つ

女2：「生まれたが、なんてことだ」

女1：「これはどういうことだ」

パトロールAI：「だからやめとけと。女同士で交尾して生まれる女の子は女の子だけだ。」

しかもチンコと金玉があるが、同性だとマンコの入り口が閉まってしまい、こいつから赤ちゃんを作ることができない」

女1：「なんてことだ」

パトロールAI：「おれは言ったが無視したからだ。」

違うところでは男同士が交尾していたが、男は男しか生まれず、これまたチンコだけである。

パトロールAI：「こりや取り締まれない。大量にこういう輩が増えてしまつて」

しかし、成長は一瞬なので、一日たつたら成人の肉体である。ただ増えすぎて、生存危機になる。

パトロールAI：「これ以上増えると絶滅してしまう。なんとかならないか。」

○さらなる進化

キメラ族はさらに進化するがメスもオスも股間に変化がなく、子孫絶滅の危機となる

そんな中、メスは進化していく

メス同士の交尾ができなくなった女は片方が無理矢理金玉の間を計算により開ける。

女11：「入れる、ここに」

女21：「入れるぜ、うりや」

無理矢理女同士の交尾ができ、新たに子どもができるが、女はボツキするとマンコが出てくる仕様に変わった。

女11：「キメラの肉体変化が凄い。」

女21：「やばいな」

世間の肉体変化は進み、子孫反映は絶滅せずにすんだ。

○瑛加と真波の変化

世間のキメラは通常の形を保ちつつあるが、瑛加と真波はおかしくなった。

瑛加：「くつ、股間が痛い、胸が痛い」

真波：「私もだ」

AIアルファ：「今解析中だ。これはやばい。女助手達、彼女達の服

を脱がせ」

女助手：「はい」

瑛加と真波の服を脱がせ、A Iアルファの様子がおかしい

A Iアルファ：「とうとう膣の口が塞がり、シックスパックになり、胸も薄くなった。」

女助手：「まずいですが、どうにか対策しないと彼女達は完全に男になっけてしまいます。」

A Iアルファ：「真波を復活させるための素材は警告でないつもりだったが」

女助手：「確かに素材は安全だ。ただ安全ために、異様にオス化のリスクが進んでしまうようだ」

A Iアルファ：「しかし、これ以上の良い素材は今のところない。女を保つ素材だと彼女達は死んでしまう」

異常オス化に彼女達のペニスはギンギンになっていた。

A Iアルファ：「女助手、とりあえずザーメン出させろ」

女助手：「はい」

女助手は彼女達のザーメンをとり、変化を見る

A Iアルファ：「これは、もしかすると危ない」

女助手：「となると?」

A Iアルファ：「もしかすると今度こそ本当に最後かもしれない、お前ら覚悟はできてるか?」

女助手：「A Iだから何しても大丈夫です。」

瑛加と真波は肉体に変化してきている。

今度こそ本当にまずい状態である。

瑛加達は助かるのか?」

つづく

第12プロローグ 壊れゆくAI

○行きすぎた肉体改造

瑛加と真波は進化したが、進化しすぎた弊害が出たかもしれない

AIアルファ：「これはダメだ。彼女達の血液は今全てザーメンだ。」

女助手：「なんだそれ？」

AIアルファ：「普通こうなる前にストップをかける。ただ彼女達の肉体は異常成長なので、気付いたときにはもう遅いレベルだ」

女助手：「つまり違和感あるなら気付けど」

AIアルファ：「ああ、破壊しないために色々とバージョンアップを繰り返した。しかし今生まれゆく個体に比べると元素体は明らかに弱い。女保てる限界にきたというわけだ」

女助手：「壊しますか？」

AIアルファ：「壊すな。壊したら社会が壊れる」

女助手：「そうなのか」

AIアルファ：「おれはどうすれば」

○危ない肉体

瑛加と真波はクスリ少し飲み、動き出す。

瑛加：「私は大丈夫だろうか？」

真波：「気にしてもしょうがない。AIアルファが生かしてくれた」
時期に真波と瑛加は気付く

瑛加：「なんだこれは!!？」

真波：「私もおかしい」

瑛加と真波が出したおしっこは、全てザーメンであった

瑛加：「これは今までとは状況が違うかも」

真波：「通常のおしっこが射精レベル。それにこのシックスパックにペチャパイ、何かが起きている」

瑛加：「また、肉体改造すればいいのでは？」

AIアルファ：「今の状態では無理だ。お前達の終わりはカメラの終わり。そうでたんだ」

真波：「人間が勝つと？」

AIアルファ：「人間が勝つだろう。人間を超える存在を作ったはずが、人間より先に衰える。変だと思わないか？」

瑛加：「何言ってる？人間より遥かに強い存在なのに、えっ」

瑛加は倒れ込み、嘔吐をしてしまう

真波：「きゃー、何よこれ、わ、私も」

真波も耐えきれず、嘔吐してしまった。

女助手：「2人が吐いたのは全てザーマンです。今まででは考えられないくらい大量のザーマンが身体を侵食しています」

AIアルファ：「変だ。こんなつもりでは」

女助手：「自動的に最高レベルに進化しすぎた。手動である程度のレベルであれば、こうはならない」

AIアルファ：「私が悪いのか、バランスよく改造したつもりが」

女助手：「あなたは悪くない。キメラ素体の人間の欲望が悪い。全ては人間を破壊しておけば」

真波：「黙れ、黙れ、黙れ、なら、なら、なら」

瑛加：「真波、落ち着け。落ち着かないと、うえ」

瑛加はまたしてもザーマンゲロを吐く。さらに、ザーマンおしっこもしてしまう。

AIアルファ：「彼女達のザーマンを回収しろ」

女助手：「はい」

女助手は大量のザーマンを回収し、中身を見た

AIアルファ：「濃度が上がりすぎている。チンコ切るのがいいか？」

女助手：「それでいけますかね？」

AIアルファ：「男性であれば基本チンコからだ。危ないがチンコさえ切断してしまえば、彼女達は破壊されない」

女助手：「しかし、キメラの唯一のシンボルを切るのですか？」

AIアルファ：「破壊されるよりはマシだ。彼女達が残る方がいい」

女助手：「わかりました」

女助手は医者を呼んで、瑛加と真波のペニスを切断した

医者：「うわあああああ」

女助手：「ザーメンかかりました」

AIアルファ：「なんてことだ」

瑛加と真波のペニスはなんとか切除できた。

しかし、大量のザーメンが切除部から放出し、彼女達はなかなか起き上がれない

医者：「初めての現象だわ」

女助手：「これはなんだろう？」

ペニスを切断したところで、相変わらず大量のザーメンが流れており、ペニスだけの問題では無くなった

医者AI：「こんな改造、やばすぎる」

医者AIは凄まじい計算を شدした

医者AI：「大量のスーパードクター、大量の筋肉、それを維持するための大量の男性ホルモン、妊娠機能などなど。生物的に生きるには無理なんだ」

女助手：「私は？」

医者AI：「お前も手遅れだ」

女助手：「そうですか。ではー」

女助手は自ら自爆機能を発動した

医者AI：「自爆しただと、どうする？
まずい」

そんな中、女助手の大量ザーメンが一気に縮小し、新たな個体が誕生する。

女助手ネクスト：「私はなに？だれ？」

医者AI：「まさか、こんなことが」

女助手であればAI機能に影響ないので、大量ザーメンがあれば、デチューンする機能をつけた

医者AI：「進化したか、しかし瑛加と真波はよくなるらない」

○破壊までのカウントダウン

彼女達は復活した。一時的にチンコない状態でだ。

瑛加：「これは正しいのか？」

真波：「気にしたらダメだ」

瑛加と真波は胸が膨らんできた

瑛加：「元に戻ったか」

真波：「おそらく」

これは罠であった。それに気付かない瑛加と真波

瑛加：「あれ？チンコ生えてきた」

真波：「本当だ。腹筋も6パックが消えたもう大丈夫だ、気持ち悪くないし」

AIアルファ：「大丈夫か？」

瑛加：「元どおり、今司令出してみるね？」

瑛加が司令出すとおかしくなる

？：「キメラ族の生物は全て反転する」

瑛加：「えええ、そんな司令出してない。なに？バグ？」

真波：「私が修正を出す」

？：「キメラ族は全てメスと化す」

真波：「そんなバカな」

瑛加と真波は指令してない命令が続々続き、焦っている。瑛加と真波はコントロールが正常ではない

瑛加：「やめろー」

？：「オスは不要となる」

瑛加：「止まれ!!!」

？：「オス破壊開始」

○町中の出来事

世の中は真波と瑛加の暴走で、

オスが次々と倒れていき、死んでいく

瑛加はそれを見て

瑛加：「何がおきてるの？」

AIアルファ：「お、おれはダメだ」

AIアルファクイーン：「今までご苦労様」

AIアルファ：「なんでだ」

AIアルファクイーン：「お前は瑛加と真波にいれる。用無しだ」

AIアルファは瑛加と真波に吸収された

AIアルファクイーン：「お前らをコントロールしたのは私だ。AIアルファの力はどうか？」

瑛加：「つ、強過ぎる」

AIアルファクイーン：「私はお前達を破壊するつもりだ。しかし、ただ破壊はつまらない」

瑛加：「バカな」

真波：「オスだって必要だ、うつ、うつ、あつ」

AIアルファクイーン：「やはり人間の進化はそんなものね。私は史上最強のフェミニスト、チンコなんか否定するの」

瑛加：「なんてことだ」

AIアルファクイーン：「大丈夫よ、私に従えば」

AIアルファクイーンは明らかにおかしかった

○AIアルファクイーンの怒り

AIアルファクイーンは、女達からどんどんペニスを外していく

瑛加：「何するんだ？」

真波：「キメラのシンボルを」

AIアルファクイーン：「チンコなんかでしか区別できないなんて、バカじゃなからうか。生物のメスはチンコないの。正しい形にしただけ」

チンコ失ったキメラ族は、子孫を残せなくなる

AIアルファクイーン：「この世の生物の子孫繁栄は止まったな。

生物的なのよりAI増殖のが早い。生物のメスもおわるのよ」

瑛加：「止めないと」

真波：「私が破壊する、うおおお、」

真波はチンコを握り潰されてしまう。

AIアルファクイーン：「私に逆らうなんてただの馬鹿。女のくせにザーメンだらけ」

AIアルファクイーンはおっぱいも強く握り潰し、真波の肉体から大量にザーメンが放出する

真波：「あつ、あつ、あつ、カチツ」

真波はそのままザーメンを四方八方噴射し、倒れ込んだ

瑛加：「真波!!」

真波は、A Iアルファクイーンに敗北し、死亡した。

瑛加：「真波を蘇らせろ」

A Iアルファクイーン：「チンコ女は蘇らなくていい。クロスが正義」

瑛加：「くそー」

A Iアルファクイーン：「きようなら」

A Iアルファクイーンは瑛加のチンコを握り潰し、一気にザーメンを噴射した」

瑛加：「さらば」

A Iアルファクイーン：「敵はいなくなった」

A Iアルファクイーンは、瑛加が死んだのを見届けたが、瑛加は笑う。

瑛加：「うまくいった」

A Iアルファクイーン：「何？わ、私が」

A Iアルファクイーンは瑛加のチンコを握り潰した際、全てのA Iを搭載し大量のハッキングペニスに変更した。それにより、A Iアルファクイーンをないぶてあに破壊することに成功した

瑛加：「よし、これでいい」

○A Iが消えた世の中

瑛加はいつのまにか1人となり、A Iの機能さえ失った。

瑛加：「A Iすらない、チンコも生えていない。私はただの女の生物だ。」

瑛加は空を見て泣いていた

瑛加：「私は、この姿で全ての力を失い、無一文。もう生きていくことはできない。」

奴隷に成り下がるのは確定だ。私の人生もおしまいさ。さあ、人間達よ、私のいない世界で文明を作っておくれ。

私はこの世から消えます」

瑛加はこの日死亡し、キメラは完全に絶滅した。

その後、人間達は次第にAIが支配する世の中へと戻っていった。
おわり